

湖底へ

中野睦夫

肩を揺すられて目を覚まし、バスの座席にいる自分を見出した。バスは揺れがなく、タイヤの音がかすかに聞こえている。Iが起こしたのは目的地に近づいたからだ、窓ガラスに額を当てても、外灯の明かりの青白い流れのほかなにも見えない。車内は明かりが消され、ほぼ満員の乗客は心地良さそうに寝ている。ハンカチで顔をおおっている者もいる。夜中に見知らぬところで降りホテルを探さなければならぬと思うと、みんなの眠りが羨ましく、このまま寝込みたい気持だ。車掌の顔に乗客の眠りを覚まさせたくないという表情が浮かんでいる。Iもすでに通路に出て、私が立つのを待っている。

バスが停車してドアが開いた。目を覚ました何人かが窓を眺め、真つ暗なので安心して眠りにもどって行く。下車したのはもちろん私たちだけで、降りると同時にバスは動きだし、車も途絶えた夜中の路をたちまち遠ざかった。眠りこんでいたせいもあり、自分の意志で降りたのではなく、無理やりに降ろされた、そんな気持が残っている。

あたりを眺めてもバス停の標識があるだけで、路の左右に暗い林がひろがるばかりだ。旅行案内に出ていた観光地とは思えない。降りる停留所を間違えたのか。そんなはずはない。バスに乗るとき車掌に確かめたのだ。車掌も、起こすから寝ていていい、そう言ったのだ。

「ホテルはどこなの」

Iが心細そうな声で言った。

「……………」

近くにあるはずで、あたりへ向けた目をこらした。路の向こう側、月も星も出ていない暗い夜空の下に、黒々とした山の形がかすかに見分けられる。ということは、あの山の下に湖があつて、湖畔にホテルがあるのだろうが、そこへ行く路がわからない。向こうから来る車がスピードを落とし、二三百くらいメートル向こうで右折して林へ入って行く。ホテルへ行くらしい。そう見当をつけ、そのほうへ歩きだした。

「こんな時間に、予約もなく大丈夫かしら」

ホテルがあることが確かめられ、Iひとまず安心したような声でIが言った。

「大丈夫さ。こんな季節はずれだ。空っぽだよ」

しばらく行くと、左手の樹々のあいだにホテルの明かりが点々と見える。車が右折したところまでもどる必要はなく、細い路が林のなかをその明かりのほうへつづいていく。その路を行くと、いっそう細い土の路になり、樹々の枝が頭上をおおい、ホテ

ルの明かりを目当てになかば手探りするように進んだ。後ろから来るIが土に足を取られて声を上げるので、そのたびに立ち止まらねばならない。

ようやく林を抜け建物の下に出た。見上げると、夜中なのにたくさんの窓に明かりが灯っている。思いがけない大きなホテルで、どうやら裏手に出たらしい。出入口に近づくと、ドアが開いている。なかへ入ると、薄暗い通路が真っすぐつづき、食器を洗う音や女たちの話し声が聞こえている。とうに寝静まっているだろうと思っていたのに、そんな大勢の客があるのか、まだ仕事を終えていないのだ。

Iは玄関へまわろうと言ったが、路を探るのが面倒なので、先に立って薄暗い通路を進んだ。従業員に会ったら案内してもらえばいい。それにこんな遅い時間だから、玄関が開いているとはかぎらない。長い廊下の端に来て左に折れたとき、Iが後ろで誰かに話しかける声が出た。振り返ると、右側の廊下からやって来たのだろう、ひとりの男を捉まえ話している。その男がじろりと見たのでタイミングを逸し、Iに任せ黙って見守った。

Iは、裏口から入ったことを謝ったあと、部屋の交渉をはじめた。おどろいたことに男はしきりに首を横に振っている。満室なんてことがあるだろうか。もしそうなら、こんな夜中にどうすればいいのか。もちろんIは必死で頼みこんでいる。ふたりの話は五六歩しか離れていないのに聞き取れない。このあたりは従業員たちの宿舎になっているらしく、空き箱や傘などが雑然と置かれている。ドアのながひどくうるさいのだ。

Iは説得に成功したらしく、男は廊下を引き返して行った。近づこうとすると、彼女はきつい声で、「そこを一步も動いちゃだめ」と言った。いまの男は警備が担当なのか、裏口から無断で入りこんだことがよほど怒らせたらしい。Iの口調は、男に約束したのでここからは私が責任を取る、そう言っているのだ。仕方なく黙って立っていると、洗い物を終えた女子従業員たちが私たちをじろじろ見ながら通りすぎ、近くのドアへつづぎ入って行く。

しばらくして年配の女中がやって来た。女中は立ちどまり、ついて来るようにと手招きすると、くるりと背を向け歩きだした。あわてて後を追った。長い廊下を二三度曲がり階段をいくつか登ると、ふたたび長い廊下が待っている。しかも薄暗く、廊下というより通路といった感じで、ところどころ明かりが途切れている。ふたたび明るい廊下に出たが、よほど大きなホテルらしく、いくつもの階段があり、長い廊下がつづき、尽きることがない。余計な仕事をさせられているのが不服なのか、先に行く女中は口をきかないばかりか、振り返るつもりもない。ひどい早足なのでついて歩くのが精いっぱいだ。こんなところで女中を見失ったら、迷子になってしまう。

ようやく女中はひとつの部屋の前で立ちどまった。ところが、女中はドアを開けただけでくるりと向きを変え、私たちを突き飛ばさんばかりに引き返した。あの長い廊下を引き返すのはたしかに面倒にちがいない。それにしても信じられないことだが、

こんなところまで連れて来たのは、やはり満室なのかもしれない。

入口で靴を脱ぎ控えの間からつぎの部屋へ入ろうとして、もういちどおどろいた。夜具は敷きつばなしで、座卓の上は食事の後片づけもしていない。女中が部屋を間違えたのではないのか。そう思っただけをためらっている。「ここでいいのよ」と言っただけで、エは先に入った。男との交渉で部屋の状況を知らされていたのだろう。

敷きつばなしの夜具を避け窓の側に出た。カーテンを引き窓を開けると、二メートルくらい離れたところに崖があり、部屋の明かり露に濡れた岩がきらきらと光っている。身を乗り出すと、上の階と下の階の窓の明かりがおなじように岩の壁を照らしている。何階かわからないが、大きな建物の裏側に位置する部屋であることは確かだ。

窓の下にある椅子に腰を下ろした。それにしてもひどい散らかりようだ。よほどだらしない滞在者がいたのだろう。客室というより従業員の宿舎という感じだ。もちろん夜中に飛びこんだのだから警沢はいえない。

姿を消していたエが部屋に入ってきた。着替えてこざっぱりした格好をしている。どこで探したのか、両手にバケツと箒を下げている。こんな夜中に掃除をするのだろうか。疲れた身体を早く横たえたいので、その必要はないと言おうとするが、声が出せない。黙って見守っていると、敷きつばなしの布団や脱いだままの浴衣を小部屋へ運び、テーブルの食器類を掻き集め廊下に出している。疲れているはずだが、アパートの部屋の掃除と変わらぬ様子で、すこしも面倒そうでない。彼女の動きを見ているだけで疲れが出る。

眠気がこらえ切れず目を閉じた。だが、眠れないことはわかっていて。旅行に出るから毎日そうだが、バスのなかでは眠れるのに、旅館に着き寝ようとすると、頭の一部がどうしても寝ようとしれないのだ。

それでも目を閉じていると、バスに揺られている感覚が蘇った。同時に、ホテルが横滑りに動いているように感じられ、朦朧とした頭にいろんなイメージが浮かび出た。夕陽を受けて刃物のように光るアスファルト路、幾重にも連なる紫紺の山々、鏡面のように傾いて輝く湖、渓谷の底の白い流れなど、バスの窓から眺めるともなく眺めていた光景が、こうしてホテルに着き目を閉じると、鮮明にあらわれ眠気を圧倒するのだ。しかもそのイメージの洪水は日一日と量を増している。量ばかりではない。いよいよ鮮明になり、スライド写真のようにとめどなく映し出されるので、不吉な予感をおぼえながらも魅入られてしまふのだ。

これもみな、旅行の目的がわからなくなっているせいかもしれない。四五日の休養のための旅行が、一日伸び二日伸び、もう半月になっている。しかもバスに乗って遠距離移動するという旅行に変わり、ホテルに着くのはいつも夜中だ。どうしてこんなことになったのか、自分でわからない。予定どおりに都会へもどって行けばなんでもなかったのに、目を伸ばしているうちに、引き返せなくなったのだ。ホテルに着くと、明日は都会へもどろうと決心しながら、翌日になると、旅をつづけたい気持ちに押し出

され、いちばん遠くへ運んでくれるバスに乗ってしまった。都会の生活にもどるのを怖れている、あるいは、もどるべき都会そのものがなくなってしまった、とでもいうように。

それにしても、Iはなぜ旅を一日伸ばしに旅をつづけることに反対しないのだろう。まるで最初から予定されたみたいに黙ってついて来る。彼女が都会へもどりたいと言えば、そうするつもりだ。旅をつづけるうちに彼女に顕著にあらわれた変化は、じつは私自身そうなのだが、しだいに寡黙になったことだ。その結果、いまでは、必要なひと言かふた言のほか、ほとんど言葉を交わさない。

したがって彼女の気持がわからなくなっている。はじめのころは、言葉を交わすと、守っている共通のものが壊れる、そんな気持から沈黙していたように思えるが、いまでは、言葉を交わすことでふたりのあいだに生じているなにかが露見する、そんな気持から沈黙しているように思えてならない。もちろん理由はわからないが、Iも都会へもどることを私以上に怖れているのかもしれない。

Iは浴室と部屋を往復しながら部屋を拭き掃除をし、テーブルの上もすでにきれいに片づけた。その様子はいっしょに生活をはじめたころを思い出させたが、そのとき、なにか間違ったことをはじめたような気持がしてならなかったものだ。それにしても、朝まで四五時間眠るだけで必要のないに、どうしてあんなにいていねいに掃除するのだろう。どうやら彼女は、部屋の交渉を自分でしたので客であることを忘れ、部屋の管理は自分の責任だと考えているらしい。そのことが彼女に活力を与えている、そんなふうにも思える。

たしかに旅行を伸ばしているうちにIのなかでなにか秘めた意図が生まれた、それが彼女を支配しはじめている、そんなふうに見える。そうでなければ、都会の生活に早くもどりたいとどうして言いださないのか、わけがわからない。だが、それなら、なにを目的とした、どんな意図だろう。彼女は旅行など興味はないはずだ。

ようやく掃除を終え、夜具を敷くのかと思っていると、Iは鞆の中身を出しテーブルにならべはじめた。家から持って出たものばかりではなく、旅の途中で買った細々したものまで、いくつかに分けてならべている。昨夜まではホテルに着くとすぐ疲れた身体を横たえたのに、まるでここがこれから長く滞在する最後の目的地であるかのように落ち着いた様子だ。そんな彼女になにか言おうとしながらも、なぜかためらわれ、あくびを繰り返すばかりだ。

すこし眠ったらしく、ふと目を覚ました。暗く深いところへ落ちて行くこうとしていた身体が、反転して浮き上がり、ここに連れもどされた、そんな気分だ。まだ椅子に坐り、上着を着て靴下もはいている。Iはいなくて、テーブルの上に鞆から出したものがひろげられたままになっている。どこへ行ったのだろう。そう思うと同時に、はっとして、さらに目が覚めた気がした。そうだ。Iはどこかへ行ってしまったのだ。

だから、自分のものと私のものを分けたのだ。これ以上旅をつづける気持のないことを、みずから姿を消すことで宣言したのだ。当然のことだ。彼女を責めることはできない。私自身、自分の意志ではどうにならないのだから……。

水の音がしている。その音に導かれ控えの間に入り、そこにあるドアを開けてみた。なかは浴室で、蛇口から水が出ている。Iが床のタイルにしゃがみ、歌をうたいながら洗濯をしている。めったに歌などうたわないのに、よほど機嫌がいいらしい。あるいは、アパートの生活にもどっているつもりだろうか。そう思うと、哀れな気持がする。覗いているのに気づかないのか、Iは手を動かしながら歌いつづけている。その後ろ姿を見つめたまま、声をかけるか音をさせるかしてこちらに顔を向けさせようと思いつながら、なぜかそれができない。

Iはようやく振り向いた。手を休めずに顔を半分こちらに向けたのだが、微笑みが浮かんでいる。覗いているのを知っていたというような微笑みだ。それでいてその微笑みは、彼女のいつもの表情ではない。なにか話しかけなければ……。だが、やはりどんな言葉も口できず、なおも彼女の顔を見つめていた。微笑みを浮かべた表情がますます謎めいた顔に変わる。それ以上その顔を見ておれなくなり、「すこし廊下を歩いてくる」と言い、ようやく背を向けた。

その声は水の音に聞き取れなかったにちがいない。だが、廊下に出てドアを閉めようとすると、反対に押しもどされIが顔を出した。おどろいて一歩下がった。彼女はさっきの微笑みをまた浮かべている。一瞬、見知らぬ女のように思え、思わず頭を下げそうになり、あわてて背を向けた。十歩ほど進んだところで、背中に彼女の視線が感じ取れるので振り返ると、まだこちらを見ている。苛立ちに駆られなにか叫ぼつとした。だがそのまえに、彼女のほつが廊下に響く渡るような甲高い声で言った。「どんなことになっても、わたしたちはいつしよだからね。そのことを忘れてはダメよ」　どんなことになっても……とは、なんのことだろう。私の身が彼女の身に不幸なことが起こることを予知しているような言い方だ。引き返し聞きただしい衝動にかられたが、それをこらえて背を向け、廊下を歩きだした。

真夜中の廊下に人影はなく、両側にならんだドアのなかもひっそり静まり返っている。薄暗い廊下を進んで角を曲がると、おなじような廊下がつづいている。これではすぐ迷子になる、そう思ったが、そのまま薄暗い廊下を歩いていると、階段の前に出た。すこしためらったあとそこを降り、ふたたび廊下へ入った。やはり静まり返った薄暗い廊下で、ドアが向かい合ってならぶばかりだ。どの部屋からもどんな物音も聞こえない。

ふたたび階段の前に出た。さっきとおなじ階段だろうかと思いつながら降り、その階の廊下も歩きまわった。やはりドアがならぶだけだが、なぜか前へ前へと進まずおられない。しかも階段の前に出るたびに降りずにいられない。これはいったいどういう

建物だろう。窓がなく、しかも階数の表示がないので、いくら降りても切りがない、そんな感じだ。もつとも私自身、なぜかあえて階数を知らうという気にならない。

そこまで来たとき、足を止め二三歩引き返した。壁にあるせまい通路のようなものが目に入ったのだ。覗くと暗いその通路のなかに赤いランプが点々と連なっている。非常口へ通じているのだ。そう思ってそこへ入った。人ひとりがやっと通れる壁に挟まれた細い通路で、左右の壁を手探りしながら進まねばならない。突き当たったところにあるドアの外に非常階段があるのだろう、そう思いながらも進んだ。

やはりドアに行き当った。けれど、用心深くドアを開けると、予想に反した光景が待っていた。新鮮な外気に触れると思っていたのに、煌々と明かりが灯ったロビーのようなどころだ。あわててドアを閉め、暗がりのなかで気持を落ち着かせてから、意を決してドアを開けた。

幅広い廊下のようなロビーは、天井に明かりが向こうまで煌々と灯っている。その下を白い衣服を着た大勢の人がぞろぞろ歩いている。無断で入ることを禁じられているような気がするので、ドアの前を通りかかった四五人の人たちの後ろに隠れるようにして踏み入れた。振り返ると、出て来たドアはおなじ白に塗られた壁のなかに消えて見分けがつかない。

さしあたって咎められる様子はなく、というより目に映らないみたいに、誰も私にどんな関心を示さない。すこし安心して人波に混ざり歩きだした。都会の地下街のような光景で、片側にはみやげ物屋、スタンド形式のレストラン、喫茶店、ゲーム室、酒場などが連なり、向かい側にガラス張りの壁にそい白テーブルが向こうの端までならんでいる。

いったいどういことだろう。その賑わいに目を疑った。真夜中、都会の繁華街ならともかく、山のなかのホテルのなかでこのような光景が展開しているとは誰が想像するだろう。観光地の小さな街がそっくりホテルのなかに納まった感じだ。ガラス張りの壁にそってならんだ白テーブルを囲む人たちが、ガラス越しに外を眺めている。ガラス張りの壁に近づくと、上空は真っ暗でなにも見えないが、下のほうにさまざまな色の明かりが見える。ということとは、この建物は、崖の上とか、なにかそんな高いところにあることになる。

あの明かりはなんだだろう。そう思って目をこらすと、点滅を繰り返したり線を描いたりしている。どうやら湖とその岸の明かりらしい。なおも眺めていると、湖水の真ん中あたりで照明が点り、何本もの噴水の水柱が上がった。同時に、そのまわりを弧を描いている走るモーターボートが見分けられた。夜中なのに遊園地も賑わっているのだ。

ガラスの壁を離れふたたびロビーを歩きだした。人々はひどくゆっくり歩いている。歩調に合わせていると、もどかしいくらいだ。それに、その人たちは立ちどまったり急に引き返したりするので、気をつけていないとぶつかってしまう。といって、身体

が軽く接触するだけで、そんなとき人々はたがいにいていないに謝罪し合っている。

その緩慢な様子からは、長く逗留していて時間を持て余している人たちのようにも見える。あるいはサナトリウムの患者たちのようにも思える。じっさいにこれだけ多くの人たちがいるのに、大声で話している人も忙しく歩く人もなく、しっとりとした静けさに包まれている。だが、けっして病人たちではない。むしろこの光景自体がそうであるように、この人々も幻でしかない、そんな気がするくらいだ。

飲んだり食べたりしている人たちを見て、空腹をおぼえた。バスのなかで軽食をとっただけなので、せめてコーヒーの一杯も飲みたい。だが、店に入る勇気がない。あの通路でつながっていても、まったく別のホテルにちがいがなく、それに服装がちがつているのだから、店に入ればどこかへ通報されるかもしれない。この人たちとおなじ物を口にして、空腹が満たされるかどうかも疑わしい。

それにしても、この人たちは眠らないのだろうか。よく見ると、壁のところどころに切れたところがあり、せまい通路があつて、人々が出入りしている。そのひとつを覗くと、中が個室らしいドアが両側にならんでいる。昼のあいだは閉じこもり、夜中のこの時間になると、みんなそろってロビーに出て来る、そんなふうにも想像される。

ロビーの端まで来ると、段のゆるい階段がある。ひろい踊り場にも白いテーブルが置かれ、そこでも人々がお茶を飲みながら、階段を登り降りする人たちを眺めている。階段の途中の壁に大きな絵が二枚かかっている。興味をおぼえて立ちどまり眺めた。

一枚目の絵は、さつきガラスの壁から眺めた湖を描いたものにちがいがなく、湖を見下ろす構図になっている。ひどく細かい描写で、岸辺の遊園地のいろんな施設、向こう岸の森林、そこに住む動物、湖上のボート遊びの様子など、事物も人物も均一に、細密画の手法でおどろくほど克明に描かれている。そのひとつひとつを見ていくが、とても見つくせるものではない。全部をていねいに見れば、どれだけ時間が必要かわからない。といって、細密画という絵の手法上、全体をいちどに眺めてもなにも把握できず、見たことにならない。

二枚の絵へ目を移した。暗い色で塗りつぶされた絵で、ちょっと見たところ、なにが描かれているか見分けられない。だが、よく見ると、やはりおなじ湖が描かれている。おそらく岸辺で描いたものだろう、前景の濃い緑の樹々が画面のなかばを占め、その樹々のあいだにほとんどおなじ色の湖水の一部が覗いている。向こう岸は森林も湖水の色も区別がつかない。したがって単調で陰気な画面はなんの面白みもない。

一枚目の絵に視線を向け、さらに二枚目に目をもどし、ふたつの絵を見比べた。そのようにしてなん度か視線を往復させた。どちらかの絵を選択するよう迫られているような気がするのだ。だが、けっきょくはどちらの絵も気に入らず、選択をすることをあきらめ背を向けると、残っている階段を降りた。

下の階もおなじロビーで、おなじ光景が待っていた。ガラス張りの壁にならんだ白いテーブルと、反対側のレストランや喫茶店などのあいだを、やはり白い衣裳を着た

人たちがぞろぞろ歩いている。その人たちに混ざり反対側へ歩きだした。明かりに慣れたせい、その明かりのなかに夜中の暗さが染みこんでいるのが感じ取れる。そのせいで人々の様子が、幽閉されていて、夜中になると耐えられず起き出し、こうして口ピーをさ迷っている、そんなふうにも想像したくなる。実際にその歩みには、身体の芯から疲れ切ったような弱々しさが感じられる。

行止まりになつた奥に来て引き返したが、途中まで来たときひとりの男を見分け、あわてて人々の後ろに身を隠した。なぜそうしたのか自分でもわからなかったが、おそるおそる顔を出し、その理由をわかった。人々はみんな白っぽいガウンか白のバジヤマを着ているのに、その男は青色の制服を着ているのだ。目立つといえば、背広にネクタイをしめた私の格好も、大勢の人たちのなかでもひと目で見分けられるはずだ。その男はあたりを見まわしながらたえず微笑みを見せている。もちろんその微笑みはうわべだけで、侵入する私のような侵入者を見つけて追いつけず役目にちがいない。

人波に隠れたまま守衛とすれ違った。どうやら見つからなかったらしい。だが、五六歩進んでから振り返ると、ちょうど向こうも振り返ったところで、おやっという驚きとともに顔の表情を変えた。それでも気づかぬふりを装い、向こうのほうへ歩きだした。私も気づかぬふりをして人波を掻き分け、小走りに走りだした。守衛はＵターンし追つて来ているはずだ。階段まで引き返し、そこを登ろうとし、降りて来る別の守衛を目に入れ、あわてて階段を降りた。

その階もおなじ賑わいで、そこへ紛れこんだ。不案内な建物のなかで守衛たちから逃げ切れるとは思えないが、自分から彼らの腕へ飛びこむつもりはない。通行人を掻き分け廊下の奥へ進んだ。接触した人たちがよるけると、人々はたがいに助け合う。騒ぎ立てることはしないし、不法法を責めることもしない。なにかをじつと待っているだけの、ひどく大人しい穏やかな人々たちなのだ。

守衛たちから逃げとおすには、彼らが頭に描く逃亡経路の裏をかくしかないが、行き当たりばったり逃走するしかない。そこで、なんの考えもなしに壁のところどころにある通路のひとつへ駆けこんだ。両側のドアがならんでいる通路で、何人の人があわててドアのなかに引っこんだり、壁に張りつき路を開けたりして、ちよつとした混乱が生じた。

通路の端まで行き着くと、鉄の扉が待っていた。その重い扉を開けて滑りこんだ。薄暗くひんやりして、どこかに灯つた明かりが足元の螺旋階段をかるうじて照らしている。手摺りにつかまりながら一段一段、足をすくませながら降りた。井戸の底へ降りて行くかのようで、足音が大きく響く。

ようやく足がコンクリートの床に着たが、物置のような暗がりだ。靴音が途絶えたせいでしいんとし、耳を澄ませてもなにも聞こえない。その静寂に安堵をおぼえ、ここにしばらくじっとしていようと思つたが、薄暗がりのなかに細い縦となり明かりが洩れるのを見つけると、手探りでそこにたどり着いた。そしてドアらしいその個所を

押ししてみると、裸電球の灯った、幅広い、短い廊下のようなところで、両側に汚れた窓があり、なかから騒音が聞こえている。

右側は浴室らしいく、窓ガラスが湯気で曇っている。天井や壁にこだまする人声や水を流す音がする。左側は炊事場だろう、食器類の触れ合う音と話し声が聞こえる。おなじ捕まるにしても、こんな喧しいところで捕まりたくない。そう思い、急いで通り抜けた。正面にある扉のなかに入ると脱衣場で、曇りガラス戸を通し裸の動く影が見分けられる。さらに向かい側にある扉を開けると、真っすぐ廊下がつづき、人々で賑わうロビーへ通ずる例のひろい階段が目に入った。振り出しにもどったわけだ。

仕方なくそのほうへ歩いて行った。すると途中の右側の壁にドアがひとつ半分開き、降りる階段が見えた。そのドアのなかへ入り、階段を降りはじめた。暗いじめじめした階段で、しかも幅がせまく、足もとが危ない。それでもなぜかすこしも不安を感じない。この階段こそ探していた階段だ。むしろそう確信した。いつまでも降りつづけるような気持になっていると、やがて終わりに近づいたらしく、下のほうから鈍い物音が響いてきた。

見下ろすと薄暗がりなかのなにか動いている。それが見分けられるところまで来て、段の途中で足を止めた。下に見えるのは地階のホールのようなところで、薄暗がりのなかにたくさんの人が床を埋めている。なにをしているのかと目をこらしても、四角なホールは隙間もないくらい人々が詰めこまれているだけだ。声を出しているわけではなく、かすかな騒音が高い天井や壁に反響し、それが低い呻き声のように聞こえる。

天井や壁になにか描かれている。ホールの使用目的が絵で説明されているのかも知れない。そう思い、薄暗がりのなかで目をこらした。わずかに残っている炎のような色彩から閻魔マンダラにも思えるが、大半が剥げ落ち、残った部分もすっかりくすみ、なにが描かれているのか識別できない。壁画から目を離し、ホールの人たちを見守った。床を埋めた人々の関心はもちろん剥げ落ちた壁画などへ向けられてはいない。いまではそのような物語を信じるわけにはいかないのだ。

さらによく見ると、私のいる階段の下のあたりは列の後方で、ただ人々で埋まっているだけだが、向かい側に近づくにつれ列を作っている様子だ。だが、ここからは、人々が向かい側でなにをしているのかわからない。駅の出札口の光景にも思えるが、じつさいに出札口のようなものがあるかどうか見分けられない。

残っていた十段ばかりを降り、人々のなかに紛れこんだ。とにかく向こう側まで行ってみよう、そう考えたのだ。だが、ひどい人ごみで、はじめこそ人々のあいだに隙間を見つけ無理やり身体を押し入れたが、ホールの中ほどまで進むと、人垣に阻まれそれ以上は一步も進めない。

こうなつては、人々の動きに身を任すほかはない。そう思い、まわりの人たちの顔を眺めると、老人がほとんどだが、私のような四五十代の男女もすこし交ざっている。

みんながひとりぼっちで、話し声や呼び合う声は聞こえない。この試練にひとり耐えている、そんな緊張の表情が顔に張りついている。人々の動きに逆らうことをあきらめると、すこしずつに右のほうへ押しやられ、壁に押しつけられた。見ると、タイルの壁で床から天井まで絵が描かれている。なにが描かれているか見定めようとすると、腕をいくら突っ張っても、まわりから押され目とのあいだに必要な距離を保つことができない。そうしているうちにも、壁にそってすこしずつ移動することを強いられた。

そこまで来たとき壁に窓がある。その窓枠にすぎりついた。厚いガラスのはまった大きな窓で、ちょうど水族館の水槽を覗くような格好だ。ガラスに顔を押しつけると、左右に交差する光の流れが目に入った。車のヘッドライトだ。都会と地方の都市を結ぶハイウエーで、長距離トラックが夜を徹し走っているのだ。するとここはまだ地下ではないのだろうか。バスターミナルで、長距離バスに乗るためにならんで待っているのだろうか。もしそうなら、ひどい思い違いをしていることになる。

その窓にすぎり交差する光を眺めつづけた。人波は去りもう押されていないが、窓から離れる気になれない。失われていく現実の世界の象徴であるかのように、トラックのヘッドライトが流れる光景から目を離すことができないのだ。いったん目を離すと、現実の世界から切り離され、もう現実にもどれない、そんな気がするのだ。いや、気がするだけではない。すでにそうした事態に身を置いていて、そのことを教えるためにこの光景は窓に映し出されているのだ。

われに返ると、ずいぶん時間が経過したらしく、いつのまにかその窓を離れ、改札口のようなところへ向かう人々の列のなかに立っていた。ホールのなかはさっきの五分の一ほどの人数になり、静まり返っている。そのせいかいつそう暗い感じになり、いまにも暗闇に呑みこまれそうだ。よく見ると、まわりはほとんど老人ばかりで、極度の恐怖以外の感情はないらしく、間近にじろじろ見つめても、どんな反応も見せない。出札口のようなものへ向かう列はどんどん短くなる。窓口に近づくとつれ、理由のわからないまま老人たちの抱えている怖れが伝わってくる。なにか思い違いをし、誤ったことをしているのではないのか。そんな考えが繰り返し頭に浮ぶが、すでに列のいちばん前、壁に開いた窓口の前に立っていた。

やはりUの字を逆さまにした形に壁がえぐられた出札口のようなもので、おなじものが左右にいくつもならんでいる。すこし高いところにあるので、覗くには背伸びをしなければならぬ。だが、そうして覗いても、向こう側は暗く、なかの様子はわからない。気のせいかな冷たい空気が吹きつけているようにも思える。すぐに差し出せるようにポケットの財布を確かめた。けれど窓口からはどんな反応もない。こちらから要求するのだろうか。だが、どんな要求も感じないし、したがってどんな言葉も出せない。

左右の窓口を見た。それぞれの窓口にすがりついた老人たちが顔を突っこみ、なにかささやき、木の札のようなものを受け取っている。そこで老人たちに倣って背伸びをし、窓口へ顔を入れた。真つ暗なトンネルを覗くような格好だ。なにか言わなければならぬが、やはりどんな言葉も思い浮かばない。そのときふと気づいた。顔の前に黒い幕が下がり、その布越しにふたつの目がこちらを見つめている。びっくりとも動かないその目を見つめ返した。黒い幕の裏に鏡があり、そこに自分の顔が映っているようにも見えるが、それでいてふたつの目はなにかを熱心に求めている、そんなふうに思えてならない。

その目をじっと見つ返した。こうしていると、その目に吸いこまれるような奇妙な快感がある。だが、やがて息苦しくなり、窓口から顔を出した。その一瞬の間をつき、後ろで待っていた老人が私を押し退け、窓口へ顔を突き入れ、なにか言った。なんて図々しい老人だろう。老人の両肩をつかみ引つ張った。窓口にぶらさがった老人は大げさな悲鳴を上げ、床に転げ落ちた。もういちど窓口へ顔を突き入れた。染みだらけの汚い痩せた手が黒い幕の下から差し出され、木の札を持っている。その木の札をつかみ、逃げるようにその場を離れた。横取りされたことに気づいた老人がすがりつこうとしたが、手がズボンに触れたただけだ。

窓口の離れた人たちが向かうほうへ進んだ。木の札がなにを意味しているのかわからないが、手に入れたことに満足していた。ホールのいちばん奥の隅に來ると、そこに鉄の大きな扉があり、みんなはそこに集まっている。その後ろに立っていると、やがて重い二枚の扉が音も立てず向こう側へゆっくり開いた。老人たちはそこへ吸いこまれるように入って行く。私もその後につづいた。

洞窟だなど思いながら人々の後ろから進んだ。空気が冷えていて、水滴が頭に落ちて来る。壁のところどころに凹みがあり、蠟燭が灯っている。その明かりで見ると、やはり岩をえぐった洞窟であることがわかる。だが、その貧しい明かりにもかかわらず、目をはつきり開けておれない。暗さとその光の双方が奇妙なくあい作用し目を晦ませるのだ。

深い洞窟らしく、前方へ蠟燭の列がつづいている。前に行く人のすぐ後ろについて進んでいると、どこかで地下水が流れる音が聞こえた。小さな滝のような音で、それがしだいに大きくなり、身体の中に響きはじめた。暗い足もとを見つめながら歩きつづけた。足の下はぬるぬるし、それに下り勾配なので、気をつけないと、滑って転びそうだ。

やがて五六段の段があり、それを降りると、ふたたびゆるい坂にもどった。靴はすつか濡れ、その冷たさに脚の感覚がなくなりそうだ。その麻痺がしだいに上半身へと昇ってくる。それなのに頭のなかには、明るい光のイメージが煌めきつづけている。場違いのように思えてその光のイメージを払い除けようとするが、その光のイメージ

はいっそう克明になり、勝手に頭のなかで煌めきつづけている。

前を歩く人たちが立ちどまった。洞窟のなかの小さな広間のようなところで、みんなはひと塊りになっている。ここが終点だろうか、そう思っていると、突然、天井やまわりの壁から水が噴き出し、たちまち全身ずぶ濡れになった。水のあまりの勢いにまわりの岩を崩れるかと思えるほどで、密閉された洞窟に轟く水音とともに水に吞まれそうだった。

けれど水の噴射は急にやみ、人々はふたたび歩きだした。後につづいてしばらく行くと、改札口のような低い鉄の柵があり、そこを通るとき目に映らない誰ががすばやく手から木の札をもぎ取った。さらに十歩ばかり進むと、こんどはとつぜん黄金色に輝くものに取り囲まれた。もうこれ以上は進めないらしい。そう思って顔を上げると、小さな部屋のようなところで、つぎの瞬間に扉が閉まり、真の暗闇に包まれた。

一瞬しか目が捉えなかったが、頭のなかに天井も壁も床もすべてが黄金色に輝く密室の様子が記憶に残った。どうやらさつきまで頭のなかで煌めいていた光のイメージがこのような形で凝縮し、そのなかに納まったらしい。そう気づくと、無上の悦びに満たされた。真空の部屋のなかのように身体が重みから解放され、完全な自由の感覚とはこのことだと確信した。

やかで足の下の床が揺れたと思うと、すうーと身体が落ちはじめた。光のイメージであるこの部屋自体がエレベーターに似た乗り物になったのだ。閉じた目をさらにつよく閉じた。いまにも失われる意識をすこしでも長く保とうとしたのだ。もちろんそうしたところで意識がすぐに失われることはわかっていて。そこで、自分から意識が失われて行く方向へ意識を傾けた。それに応ずるかのように垂直に落下していた乗り物が斜め下の方角へ滑降しはじめた。湖底へと向っているのだ。そうだ、湖底へ滑り落ちて行くのだ。湖底へ……。

「そんなところで寝込むと、風邪をひくわ」

肩を置かれた手の感触に目を開けると、まだ窓辺の椅子に坐っていた。いつのまにか寝入っていたのだ。見ると、部屋には夜具が敷かれ、Iもパジャマに着替えている。

「ああ、まだここにいたのだ」
思わず言った。

「どこにいるつもりだったの？」

めずらしくIが訊ねた。

「あるイメージの流れのなかにはまり込み、もつすこしで引き返せなくなるところだった。これ以上旅行をつづけるのは危険だな」

「というと、家にもどるの？」

「嫌なのかい？」

「いいえ。あなたといっしょなら、わたしにはどこだっておなじことだもの」

「どこだっておなじ？ それなら、いまの続きのイメージのなかでも？」

「ええ、そうよ」

「……………」

思わず身体を震わせた。それでいて都会へもどるという考えほうがむしろ非現実的であるような気がした。なぜなら、Iはすでにそのイメージの世界に入ってしまったている、そんなふう思えるからだ。

(了)